
エデン～創造と破壊～

近山 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデン〜創造と破壊〜

【Nコード】

N1143BA

【作者名】

近山 流

【あらすじ】

世界線の移動によってパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。
彼はその世界にどのように関わっていくのか……

ジャンルは主人公最強ハーレムと、王道ですが、私が1番好きなジャンルだったのでチャレンジしてみました。

勢いで書きはじめてしまった小説で駄文ですが、がんばっていくので、是非アドバイスお願いします。

設定など（前書き）

まずは、設定です。

設定など

主人公

リヨウ・エンドウ（15）

大規模な世界線の移動によりパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。

能力

創造と破壊

具体的な内容は本文中で

世界設定

科学ではなく魔術が発達した世界で、今だほとんどの国が民主制ではなく王制となっている。

魔法について

火・水・風・雷・土の基本属性に光・闇の上級属性、そして、氷・炎などの派生属性などがある。

属性の中にも下位魔法、中位魔法、上位魔法、特位魔法がある。

光・闇の上級属性は基本属性と違いランクが一つずつ上になっていて、上級属性の下位魔法は基本属性の中位魔法にあたる。

設定など（後書き）

不定期更新ですが、頑張っていきたいと思えます。
基本属性に風を追加しました。

パラレルワールドへ（前書き）

まず第1話です。

パラレルワールドへ

その日、この世界から遠藤亮という存在が消えた……

「ここはどこだ？」

リヨウは周囲を見渡す。

そこはみられない森だった。

彼はさつきまで家への帰路を歩いていたはずだ。

しかし全く検討がつかない状況に立たされたにもかかわらず、彼の精神はいたって普通だった。

これは、彼の適応能力が凄いとということではない。彼はまだ完全にはこの状況を理解できていないのだ。

「とりあえず情報収集だな、移動しよう」

その時だった。彼は生まれてはじめて、命を脅かすほどの脅威を感じた。

パラレルワールドへ（後書き）

初めて小説を書いてみましたがいかがだったでしょうか？

是非感想お願いします。

脅威

脅威の正体は体長2メートルをゆうに超える巨体を持ち、その巨体に見合うほどの大きさの強靱な爪を持つ熊だった。

リヨウは生まれてはじめて心の底から恐怖した。

彼は今まで日本という平和な世界で命の危険などとは無縁な生活を送っていたのだ。

少なからず自分を守るすべを知っているとはいえ、目の前の脅威を排除できるほどのものではないし、その前に恐怖で動くことができなかった。

熊の腕が振り落とされる。

恐怖で固まる体を無理やり動かし攻撃をかるうじてよける。

ぎりぎりかすってしまった爪により服が軽く破れ、さらにその反動によって大きく吹き飛ばされてしまう。

泥だらけになり息も絶え絶えの体でリヨウは思う。

「せめて何か武器があれば…」

その時彼の頭によぎったのは、彼がよく遊んでいるアクションゲー

ムで愛用している太刀だった。

そしてそのイメージは彼の中でしだいにより強固な物へと変わって
いく……

熊がその腕を大きく振りかぶったその瞬間、

彼の能力は開花した。

脅威（後書き）

2話読んでみた感想は……短い？

こんな短かったっけ……

これからはどんどん長くしていくつもりです。

感想お願いします。

熊との戦闘の描写を少し編集しました。

開花（前書き）

今回はかなり頑張った。

開花

彼の目の前には、熊に攻撃される直前まで頭に思い浮かべていた太刀が出現していた。

彼は一瞬驚いたものの、目の前の敵を倒すという本能が、理性を吹き飛ばした。

振りかぶられた熊の腕を太刀で切り上げる。

熊の腕からは決して少なくない量の血が流れているが、気にしている様子はない。

しかし、突然の獲物の反撃により、熊の動きが一瞬とまった。

リョウは立ち上がり、己の限界を超える速さで切りつける。

その太刀筋は決して良いものではなかった。

小学生が行うチャンバラのように、型なんてものは全くない。

ただ、チャンバラと決定的に違うことがある…それは、純粋な殺意、己の命を脅かすものを排除しようとする明確な殺意だ。

しかし、致命傷を与えることはできず、熊は体制を立て直してしま
った。

所詮は非力な人間だ。熊に腕力で叶うはずもない。
たった一撃で太刀は吹き飛ばされ、リョウも弾き飛ばされた。

「ぐはあ」

5メートルほど吹っ飛ばされ、口から空気と一緒に血が吐き出され
た。

ここで死ぬのか？

こんな訳の分からない場所で、誰にも知られずに？

そんなの嫌だ。

まだ俺は死にたくない。

やりたい事がいっぱいあるんだ。

彼の思考はそこまでいったところで急激に冷やされていった。

彼の中に眠っていたあふれださんばかりの膨大な力がついに発動し
た。

その力は彼の中から溢れだし、周囲にも影響を与えている。

彼を中心に風が吹き出されている。

熊は野生の本能で危険を察知した。

だが、もう遅い……………

彼は目の前の脅威に向けて短く言い放つ。

「死ね」

その瞬間脅威は跡形もなく砕けちり消滅した。

そして彼は意識を失った。

開花（後書き）

感想よろしくお願いします。

警威は去って（前書き）

5話です

脅威は去って

「……………う……………いき……………て……………る？」

そっだ、熊は！

慌てて周囲を見渡す。

しかし、周りには太陽の光を隠すほどに生い茂った木々以外なものはない。

そして彼は思い出した。

熊を殺したことを、自分の中に溢れ出した不思議な力のことを……

一体なんだったんだあれは？

最初に起きた、自分が想像していたものが実際に現れたこと

そして、彼が強く念じた瞬間熊が跡形もなく消滅したこと

まず最初に考えることは、最初に起こったことだ。

試しに強く念じてみる。

「火を」

瞬間ポツという音と共に、掌から火が出現した。

なるほど、念じることで、無から有を作り出す。

まるで神の力だな。

そう皮肉げに笑ってみる。

己の想像の範囲で、戦術が無限に広がる。

確かに凄い力だ。

だが、たった火を出すだけで体力をほとんど使ってしまうようだ。改善の必要があるな。

これから楽しみだ。

彼はニヤリと笑う。そこには恐怖に震える男の姿はもうなかった。

脅威は去って（後書き）

旅立つのはもうちょっと先だと思えます。

今回は読みやすいように一文一文間をあけてみたんですがどうでしたか？

感想お願いします。

次回はリヨウの能力が少し分かります。

能力（前書き）

連続投稿

能力

あれから半年がたった。

「今日はこんなものか」

そこにはあの日出会い、リョウの心に初めて本当の恐怖を与えた巨爪熊の死体が三つ転がっていた。

自分の能力を把握し、実験し、マスターするまでにかかなりの時間が経っていた。

リョウは想像したものを出現させる自らの力を

「創造」の能力と名づけた。

安直だが、一番この能力のことを表していると思ったからだ。

さらに、実験をしていく中で創造の能力にはいくつかの制約があることに気づいた。

まず、この世の理に反することや、動物、虫、植物などの生物は創造することはできないということ。

それは逆に、生物でなければなんでも創造することができるということだ。

しかし、それにも制約は存在する。

・創造したいものを明確にイメージすること

これは簡単なようで意外と難しい。

細部まで細かくイメージしなければいけない。

そうしないと、不完全な形で出現したり、武器であれば強度が全くなく、触っただけで壊れるなどの状況に陥ってしまう。

これをクリアするために三か月もかかったのだ。

そして、

・イメージする長さ、質量によって疲労度がどんどん上がっていくこと

創造の能力を練習するにあたり、最初は何度もぶっ倒れた。

多くの敵（後にそれは魔物という存在だと知る）に囲まれた中で、危うくぶっ倒れそうになったり、何度死を覚悟したか数えきれない。そして、幾度となく死の危険に苛まれながらも、イメージの効率化をはかり、今では簡単な物だと一秒以内に、難しい構造のものでもかかって十秒という驚異的な速さで作り出すことができ、かつ、いまだ時間短縮が行うことができている。

さらに、何度も練習したことにより、力（主に精神力）を効率良く使うことにも慣れてきている。

長かったなここまで

そうして苦笑したところでリヨウは何者かの殺気を察知した。

森のなかでの安心できない生活、そして度重なる殺気に身を晒していたリヨウの感覚は限界まで研ぎ澄まされている。

やろうと思えば、半径1キロ圏内の生物反応、殺気を感知することも可能だ。

リヨウが感知したのはかなり大きい生物反応

すぐさま、彼は念じる

(サーチ)

その瞬間彼の前にはレーダーのようなものが出現した。

すぐさま、その反応に向けて、レーダーをとばす。

この機械はレーダーにぶつかった物を画面に写しだす事ができるといふものだ。

しかし、いつまでたっても、画面には何も映らない。

故障なんてことはありえない。

どういうことだ？

リヨウは首を傾げる。

その瞬間、リヨウは右上方からの殺気を直感で察知し、何も考えず左側に大きく跳ぶ。

ズダーン!!

何か巨大な物が空から降ってきた。

思考が追いつく、何だ一体!?

砂埃がはれ、そこに姿を表したのは、全長2、3メートルもあるかと思われるほど、巨体を持った狼だった。

「我は天狼なり、汝は強者たるものか？」

能力（後書き）

……書き溜め全部出しちゃった

考えなしとか言わないの！

ついにハーレム構成員の一人が登場！！

ドンドンパフパフ

………古いかな？

てなわけで、次回予告、

リヨウの前に現れた伝説の生物「天狼」

リヨウVS天狼

勝つのはどっちだ。

次回は戦闘回、頑張ります。

では、感想お待ちしております。

1月4日

修業期間を一年から半年にしました。

VS天狼 1 (前書き)

予想以上に長くなってしまったため二つに分けて投稿します。

V S 天狼 1

「我は天狼なり。汝は強者たるものか？」

リヨウの目の前に突如現れたものは最初にそう言った。

「お前はなにもんだ？」

リヨウは問う。

「天狼と言ったはずだが」

その天狼と名乗る巨大な生物は小バカにしたように言う。

「違う、そういうことじゃない。サーチのレーダーを飛ばしたはずだが、何も反応しなかった。何をしたんだ？」

「レー……ダー？なんだそれは？我はただ走ってここまで来ただけだ
が」

走って？確かに察知した殺気はまだかなり遠いものだった。だからこそレーダーを飛ばして情報を知ろうと思ったわけだが……………

……まさかリーダーが到達するより速くここまで来たっていうのか
!?

うそだろ、信じられない。

だがもしそうだとしたらかなりの、いや、想像を絶するほどのスピ
ードだ。

それにこの森に迷い込んで以来、いろんな獣と戦ってきたが、意志
疎通ができるやつに会ったことは初めてだ。このことからかなり
の知能の高さが伺える。

これはかなり面倒な敵に会ってしまったな。

リョウは心の中で舌打ちした。

「汝から不思議な力を感じる。もう一度問う。汝は強者たるものか
?」

天狼が言った。

「だったらなんだ?」

「我と勝負……いや、そんな生温いことは言わない、さあ殺しあお
うではないか」

「何言つてやがんだお前は」

なんだこの威圧感は、他のやつらとは段違いだ。

こいつは危険だ。

リョウの直感は大音量で警報を鳴らしている。

……逃げれるか、こいつと戦うのは絶対にまずい

「いくぞ！」

間髪入れずに狼がとびかかってくる。

いきなりかよ。間に合うか……

リョウは内心で毒づきつつ

アクセル

「《加速》！！」

リョウが持つもう一つの能力を身につけるにあたりマスターした力
体全身に溢れている生命エネルギーを活性化させることにより、身体
を強化することができる。

加速は足の生命エネルギーを一気に活性させることで超速で移動するものだ。

「ほう。私の攻撃をよけるか」

狼はどこか嬉しそうに言う。

(よけなきゃ今頃死んでんだろ)

リョウは心の中でそう毒づく。

「逃げるつもりか？」

「当たり前だろ。お前と戦って確実に勝てるとは思わない。俺は極力無駄はしない主義でね」

「私の速さを前に逃げれると思っているのか？」

そう言った瞬間、狼の巨体はリョウの後ろにあった。

(うそだろ！？何て速さだ)

今日何度目か分からない驚きを口にする。

アイアン

「《鉄壁》！！」

慌てて体全体の生命エネルギーを異常活性させ、肉体を鋼のような固さにする。

ガンッ！！

鉄を叩いた様な音がして、リョウの体が弾き飛ばされる。

「……………くー……………流石にいてえー」

「……………私の全力の一撃をくらってまだ生きているのか……………身体強化魔法か？……………いや、身体強化程度で我が一撃を防げるはずがない」

ここで初めて狼は驚いた。

「汝は人間か？」

「失礼なやつだな。俺は人間を止めたつもりはない」

（くそ、主義に反するがやるしかないか……………死ぬのはゴメンだ）

そして唱える……………

「創造、形状は銃、連射機能付き、弾丸は炎」

まだ、複雑な構造のものは声に出さなければ明確にイメージできない

いのだ。

そしてリヨウの手に銃が出現する。

「なんだ？召喚魔法か？」

「いいや」

リヨウはニヤリと笑い引き金を引く、

ババババババツ

一秒に10発もの速度で炎を纏った弾丸が狼に襲い掛かる。

「ツツツ！！」

狼は己のスピードを駆使して次々と弾丸を避けていく。

しかし、数が多い。

しだいに、避けられない弾が出てきて、みるみるうちに被弾数があがっていく。

「ハハハハハ：いいぞ、いいぞ人間。我が傷を負ったのは何十年ぶりだろうか」

狼は心底嬉しそうに笑う。

「我も全力で行かせてもらおう」

狼の口から何十個もの炎弾が発射される。

リヨウは銃でそれらを迎撃していく。

「火をはく狼なんて聞いたことないぞ！」

「我はただの狼なんぞではない。天狼だ。こんなものまだ序の口よ」

狼は薄く笑みを浮かべる。

VS天狼 1（後書き）

VS天狼 2は今日中に投稿するつもりです。

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

VS天狼 2 (前書き)

後半戦です

V S 天狼 2

狼を中心に強力な風が発生し、吹き荒れる。

そしてその風で作ったカマイタチを炎弾と一緒に放って来る。

リヨウは炎弾で迎撃しつつ考える。

(これじゃ消耗戦だ。このままだと威力の低いこっちがやられちまう……やるしかないか)

「炎龍!! 水龍!!」

リヨウの左右に炎龍と水龍が現れる。

「中位魔法を詠唱無し、しかも連続でか、ますます面白いのう汝は」

「行け!!」

二体の龍が狼に向かっていく。

龍が激突する寸前、狼は大きく跳び上がり回避する。

その跳躍力は素晴らしいものであり、回避は明白だった。

しかしそれはリヨウが狙っていたことだった。

スチームバースト

「《水蒸気爆発》！！」

それは水が非常に温度の高い物質と接触することにより気化され発生する爆発現象

空中にいるため回避ができない狼はその爆発をもろに喰らう。

ドバーンッ！！

狼は先ほどの少年のように大きく吹き飛ばされる。

「……………うう……………全開の風の障壁でも衝撃を殺しきれないか……………」

狼は小さく呻く。

しかし、目には未だ戦闘への意志は残っていた。

（天狼の中でも最速と呼ばれた私の速さについて来ることができ、

尚且つ、私の全力の攻撃を受けても死なず、ましてや、私の全力の防御を優に破壊するほどの攻撃魔法を詠唱なしで行うとは

「ハハハ：楽しいのう人間！！」

そう言い天狼は己の魔力の全てを牙に注ぎ込む。

リヨウは察した。

狼から巨大な力が溢れ出しているのを

恐らく次がこいつの最後の攻撃だ。

ならばこちらも全力で答えよう。

この半年の集大成

創造の力と身体強化の融合技

「《アイアンメイデン》！！」

外見はただ鋼鉄のアーマーを着ているだけだ。

しかしそれは本来ならば、圧力によって体が潰れてしまってもおかしくはないほどのものだ。

それを身体強化の《鉄壁》によって防ぐことで、絶大な防御力を発揮することができるのだ。

そして、その防御力があって初めて使える技

（炎龍、水龍）

リヨウの左右に再び二体の龍が出現する。

お互い準備が整い、片方は脚力で、もう片方は《加速》で一気に距離をつめる。

「行くぞ！！人間！」

「行くぞ！！クソ狼！」

「《牙狼天晴》！！！」

「《スチームインパクト》！！！」

強大な魔力で限界まで強化された巨大な牙での一撃

そして水蒸気爆発の衝撃を一箇所に集中させ拳に乗せて放つ一撃（近接打撃攻撃のため、かなりの攻撃力を誇るが、その爆発に自分も巻き込まれてしまうため、無敵の防御力を誇るアイアンメイデンが必要だった）が交差する。

爆風は森全体に行き届き、森は揺れ、森に住まう生物は凄まじい衝撃を感じた。

そして衝撃が治まったとき、満身創痍ながらもそこに立っていたのは、

偶然か必然かパラレルワールドに迷い込んでしまった少年、
リヨウだった。

VS天狼 2 (後書き)

戦闘回になってたかな？

あと、読者の皆様にお問い合わせがあります。

今回技をいろいろと出しましたが、《アイアンメイデン》と《スチームインパクト》の漢字表記でいいのが浮かびませんでした。

そこで、この二つの技のカッコイイ厨二ネームを募集します。

いいのがあればすぐに反映させるので、是非お願いします

今回、リョウのもう一つの能力について軽く伏線的なものを入れてみました。

どんな能力か予想してみてください。

ただ破壊するだけっていう能力ではないので………

次回で天狼回は終了です。

投稿は速くて今日の夜、遅くても明日の昼までにやります。

次回予告

天狼をくだしたりリョウは天狼に何を言うのか。

そして、天狼は自らをくだした人間に何を思うのか。

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

仲間（前書き）

書けたので投稿します。

仲間

「……………私の負けじゃ、人間。よもや、人間ごときに敗北するとは……………」

「負けだ……………じゃねーよ！！いきなり現れて攻撃されて、殺しあいさせられて、一体何様なんだお前は！」

リョウは怒鳴るがなんともないように狼は言う。

「我は誇り高き天狼じゃ」

「天狼？」

「なんじゃ汝天狼を知らんのか？」

天狼は驚いた顔で言った。

「知ってなきやまずい系の事なのか？」

「まずいというか常識じゃな」

「……………マジか。俺まだこの世界に来て半年しかたってないんだよ。だからこの世界の事とかなんにも知らないんだよ」

「…ん？……………どついつとどつじゃ？」

リヨウは天狼に自分の状況、そして能力などを説明した。

なぜ先程まで敵だったやつに自分の身の上話をしているのかとも思ったが、きずいた時にはなにもかも話してしまっていた。

もしかしたら孤独な生活が続いていたため誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

リヨウが一通り話し終えたところで天狼は尋ねた。

「なるほどの……その魔力のようで魔力でない力はそちらの世界の産物なのか？」

「俺にはまだわからん。なんせまだ能力の七割くらいしか解明できていないからな……」

「ところで汝は我をどうするのじゃ？」

「どうするって？」

「我は敗者じゃ。生かすも殺すも汝の自由」

「うーん……」

リヨウはしばらく考え、突如目を大きく開いた。

「そつだ！お前俺と一緒に来るか？」

「?????」

狼は何をいつてるのか解らないと言つように首を傾げる。

「いやだから、もうちょっと先になるかもしれないけど、いずれは俺もこの森からでていく。そしたら一緒に旅しないか?」

「汝と一緒に旅か………確かに面白そうじゃな。分かった。しかし、もうちょっととはどういうことじゃ?」

「いやね、お前と戦ってみて俺の能力はまだ伸びると思つたんだよ。ちよつどお前もいるし、修行もしやすいと思つからさ」

「ふつ、天狼を倒しておいてまだ強くなれるじゃと?全く汝には心底驚かされる」

「俺はえんど……いやリヨウ・エンドウだ。よろしく」

「我はリーズリット・フォン・ワーウルフ、誇り高き天狼の一族じゃ。リズと呼んでくれ。よろしく主殿」

「あ、あるじ!?!」

「なんじゃ。問題か?」

「いや、主つて」

「天狼にはその強さ故、一度敗北した者には死ぬまで尽くせという掟があつての」

「そんな無茶な……ん?………リズ?偏見かもしれないがやけに女つ

「ばい名前だな」

「何をいつておる主殿、我はメス……いや、女じゃぞ」

「へ??」

そこでリヨウの頭は一旦フリーズし、数秒後再起動する。

そして頭に浮かんだのはこの前読んだ小説にでてきた、人に変化することのできる伝説の生物だった。

その小説の主人公はそいつに襲われたが、かろうじてしりぞけその伝説の生物は主人公に忠誠を誓っていた。

(あれ、ここまでほとんど同じじゃね)

最終的に擬人化したら銀髪幼女がでてきて、俺はロリコンじゃないと声高らかに叫ぶことになる展開になる気がする。

「リズ」

「なんじゃ?主殿」

「もしかして人型になれたりする?」

「人化か?おお、できるぞ。じゃが、何故そんなことを知っているんじゃ?」

「いやーあはは」

「そうか、人型になったほうがよかったか」

「え！？ちよつちよつと待つ」

リヨウが言い切る前に、リズの体が輝く。

狼の姿から人の姿にシルエットが変わっていく。

そしてリヨウの前に現れたのは絶世の美女だった。

輝く銀髪に人形のように整った顔立ち。

そしてその中に明朗さを含んでいる。

リズの性格通り、活発そうな美女がそこにいた。

さて問題の体格だが、身長はリヨウより頭一つ低いぐらいで、恐らく160後半だろう。女性の平均身長くらい、もしくはちよつと大きいぐらいか。

そして、貧でもなく巨でもない絶妙な大きさの二つの膨らみ

そこに「幼」という要素は微塵もなかった。

リヨウはなんだか拍子抜けした気分だった。

一旦思考を落ち着かせたところで、重大なことにきずいた。

リズが全裸なのだ。

当たり前だ。

服なんて着てるわけがない。

冷静に考えればすぐに分かったことだ。

だが、それにきずかなかったというのは、よほどテンパっていたのだらう。

リヨウも元の世界では健全な男子高校生だったのだ。

そっち方面への興味は多大にある。

しかし、悲しいかな、女性経験が少ない純情少年には急なアドリブに対応するだけの技術は無く、目の前の光景に脳が処理落ちし、ショートしてしまう。

目をそらしながらも創造によって服を作りリズに投げつける。

「ほーホントに便利じゃのうその力は」

リズが感心するように、そして面白そうに言う。

ようやく脳のショートから復帰したリヨウは尋ねる。

「なんだか普通だったな。幼女かと思った」

「なに？ 幼子のほうがよかったのか？ 一応我は主殿の年齢と同じ年齢の体格にしたのじゃが………主がそちらのほうがいいのであれば変えようかの？」

「いやいやいやいや。大丈夫。問題ない」

変化しようとしたリズを慌てて止める。

そうしながらリヨウは思う。

これからにぎやかになるな……

一人の時には感じなかった人（明確には人ではないが）と話す嬉しさが心にしみた。

最高の出会いだったな……
リヨウは嬉しそうに笑った。

仲間（後書き）

リヨウはまだ強くなります。

今回はこの世界の具体的な説明を入れるつもりです。

次回で旅立てるかな？

次回も頑張ります。

投稿はできるだけ早くするので

では、

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

リズムの口調を変えました。

世界そして旅立ち（前書き）

かなり長文になっちゃいました。

世界そして旅立ち

お互い落ち着いてきたところでリョウはリスに尋ねる。

「リス、早速だけこの世界について教えてくれないか？」

「わかった、主殿。だが我も長きに渡り天界にいた身じゃ。普遍的なことなら分かるが、現代のことはあまりよく知らんぞ」

「大丈夫だ。知ってる範囲でいいから教えてくれ。他のことは森を出てから考えるから」

「ふつ、いい加減じゃのう、じゃがわかった。我の知っている範囲で答えよう」

「ありがとう。じゃあまずさっき言った魔法について教えてもらえるかな」

「ふむ、魔法かの……………
魔法には、まず火・水・風・雷・土の五つの基本属性と光・闇の上級属性があつての、体内にある魔力という力を燃烧させることで、いろいろな現象をおこすというのが魔法じゃ」

「じゃあ、戦闘の時にリスが放っていたカマイタチや炎弾も魔法なのか？」

「うむ。魔法と言っても下位魔法じゃがの」

「下位魔法？」

「魔力の量は人によってそれぞれじゃ。多い者もいれば少ない者もいる。中には魔力を持たないなんて者もいるんじゃ。こればかりは才能故にどうにもならん。」

そこでその魔力の使用量に応じてランクが付けられたのじゃ。まず、魔力を持たぬ者は除くが、誰でも使えるのが下位魔法。そして、常人以上の魔力を持つ者が使えるのが中位魔法じゃ。中位魔法までを使えて一流というところじゃの」

「なるほどね。だからあの時驚いていたわけだ」

「当たり前じゃ。中位魔法を詠唱しなんてどんな化け物かと思っただわ。実際は違ったようじゃがの。」

まあいい。ちょっと話が脱線してしまったがの。

そして王宮魔術師などのエリートが大人数集まってできるのが上位魔法じゃ。

あとは、各属性に一つずつしかないとされている特位魔法。古代魔法とも言われておる。これはどれもが戦略級の大魔法での、王宮魔術師が200人以上集まって初めて発動できる魔法じゃ。

これは基本属性の場合で、上級属性になるとランクが一つずつ上がっていく。上級属性にも古代魔法があるにはあるのだが、未だ成功したことはないらしいのう。だから上級属性での上位魔法が特位魔法にあたるというわけじゃ」

「戦略級魔法か……………」

「どうした？主殿」

「いや、どんなものがわかれば創造の力で俺にもできるかなと思
つて……」

「ふふ、確かに主殿ならできそうじゃな」

「他には魔法のことで何かあるか？」

「そうじゃの………あっそうじゃ。まだ派生属性と身体強化
魔法について話してなかったの」

「なんだそれは？」

「まず派生属性じゃが、基本属性の進化系とっておいて問題ない。
有名なところで言うと、炎や氷とかかの。
ランクは上級属性と同じじゃ。

あと身体強化魔法だが、これは魔力で鎧をつくるようなものだ。
しかし、魔力の消費は激しいし、強度もイマイチで使う者はほとん
どいないようじゃがの……
魔法といったらこれぐらいかの」

「なるほどな。結構いろいろあるんだな」

リヨウは顔をしかめ、その後苦笑する。

「できるだけわかりやすいように説明したつもりじゃがの」

リズはそんな顔をしているリヨウを見てニヤリと笑う。

「他には………例えば種族とかは？もしかしてエルフとか獣人とか
もいるの？」

「いるぞ、よく知っておるではないか」

「こつちの世界にもそういう小説があるからな」

「しょ、しょうせつ?」

「うーん……文献みたいなやつだ」

「ほう。文献、小説か……読んでみたいのう」

「他にはどんな人種がいるんだ?」

「うむ。」

まず人間族・エルフ族・獣人族が三大種族じゃ。他にもドワーフ族や亜人などの少数民族がおる」

「それぞれ特徴とかあるのか?」

「人間族はわかるじやろう。」

エルフ族はとても長寿で耳が長く尖っているのが特徴かの。先天的に魔力量が多く、ほとんどの者が魔術師じゃ。

獣人族は名の通り獣の血を受け継いだ種族じゃ。高い身体能力を持ち、全体的に毛深いのが特徴かの。まあ三大種族は見ただけでわかるじやろう。

我が知っているのはこれぐらいかの」

「ありがとう。他の事は森をでてから人に聞いてみることにするよ。あとさ……話は変わるけどこれからしばらく修業するつもりなんだけど手伝ってくれるかな?」

「もちろんだ。主の力には我も興味があるからの」
「ありがとう。じゃあ改めてよろしくね、リス」

「我が手伝うからには死ぬほどやらせるからの、覚悟しておけよ主殿」

「げ……………まあおてやわらかにたのむよ」

……………半年後……………

「そろそろ修業も終わりかな」

「よもや、我が手も足もでないとは……………」

そこには、１ミリの疲れも見せず佇む青年の姿と、満身創痍で倒れている体長２、３メートルほどある狼の姿があった。

リヨウは半年たち、背も伸び１８０に届くかどうかになり。顔も幼さにどこか凜々しさを含んでいる。

リカバリー

「《治癒》」

そう言うと、リズの傷がどんどん治っていく、そしてあっという間に完治してしまった。

これは、リヨウが持つもう一つの能力 破壊 の技の一つだ。

破壊 の能力……………それは簡単に言うと、生命エネルギーの操作だ。

今はそれによって、リズの生命エネルギーを活性化させ傷を治した。

一見、無敵に見えるこの能力だが創造と同じように制約がつく。

他人の生命エネルギーを操作するのは自分の生命エネルギーを操作するのに比べ大量の力を使う。

そして、創造の力が生命体に干渉できないように、破壊の力は非生命体には干渉できない。

「ありがとうの、主殿。それにしてもいつ見ても素晴らしい速さじゃのっ」

「そうかな」

リヨウは照れたように笑う。

「それにしても、そろそろ森を出るかな。充分力はつけたし、これからは森の外の世界を見てみたいからな」

「いきなりじゃな。
でもそうじゃの。それもいいじゃろう。
それに天狼相手に傷一つつかないんじゃ。それだけ強ければ大抵の
やつは瞬殺じゃろ」

「瞬殺かww」

リヨウは苦笑する。

「で、いつ出発するんじゃ？」

「うーん。できれば早いうちに行こうと思う。リスはどいつする？」

「もちろん行くぞ。何を言っておる」

リスはちょっと怒ったように言う。

「ごめんごめん。じゃあ食料とか必要なもの集めて2日後出発する
か」

かくして、数ヶ月後、全大陸中に名を轟かせ、大陸中をひっかけま
わすことになる青年の旅がはじまった。

それもなんと最適な感じで……………

第1章 旅立ち - 完 -

世界そして旅立ち（後書き）

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございました。

第1章 完と書いてありますが、実はもう1話あります。

リヨウとリズの生活をとある一日をピックアップして書くつもりです。

嘘つきと言いかもしれませんが、厳密に言つとこの話で第1章は終わりになるので、嘘ではないと思います。

次話はおまけのようなものだと考えといてください。

できるだけ早く投稿するようにします。

今回の話ですが、最後の方が少々強引だったかもしれませんが、なにかあればアドバイスお願いします。

そして今回、VS天狼のように二つに分けずこんなに長くなったのには理由があります。

それは……

これで10話目なんです！めっちゃ切りいいじゃないですか。

（おまけ入れたら11話になっちゃうけど）

読みにくければ、分けます。二つに（泣く泣くですけど）

それでは次回予告

「少年と狼のとある1日」
です。お楽しみに。

では

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

おまけ 少年と狼のとある一日

リョウ少年の朝は早い。

今日も日が昇り終わる前に起きる。

しかし、今日はいつもと違った。

いや、今日からは以前とは違うというのが正解か……

リョウの目の前には銀髪の美女がいた。

……………全裸だった。

s i d e - リョウ -

目が覚めるとそこはパラダイスだった。

「うわぁ!?!」

俺は反射的に声をあげてしまった。

だっていきなりだぜ。いきなり全裸の美女だぜ。
T O O ぶるじゃあるまいし。モモかお前は!?!

今男の夢が目の前に……………いや、夢だな。うん、そうだ。そうに違

いない。やっぱりこんなうまい話ないよな。アハハ

「……うっ……うっん。どうした主殿」

リズが目を擦りながら目を覚ました。

そっだよな。夢だよな。

「おはよう。リズ」

リズは

「おはよう。主殿………チュ」

おもむろに唇に触れてきた………自分の唇で………

流石に無理だった。

脳ガショートシマシタ。復旧マデアト10秒………10……9……8……7

……6……5……4……3……2……1……0

復旧ガ完了シマシタ。

あれ、何今の。気のせい？

やっぱり夢？そっだよな。この世界に来てずっと男一人だったからな。……

もっとみてたいけど、そろそろ起きなきゃな。やることもいっぱいあるし

ためしに頬をつねってみたが、目の前のリズは相変わらず小悪魔的な笑みを浮かべたまま。

あっっっつれねー？

どうなってるんだ？

「主殿どうしたんじゃ？具合でも悪いのかの」

そこでようやく俺はきずいた。自分に起こった奇跡のようだが現実だと……

「なっなっなっなにしとんじゃボケーー！！いや嬉しいけど、嬉しいけども……なんだかよく分からなくなってきた。旅に出ます。探さないでください」

その時の俺は後から思い出して死ぬほど恥ずかしいほどテンパっていた。

それなのにリズは笑って

「やはり主殿はおもしろいのう」
などとのたまっている。

「なっなんでいきなり。あとなんで！！??？」

「我は主に申したはずじゃぞ。天狼は負けた相手に忠義を尽くすと。もう我は主のものだ」

「お……俺のもの？……いやいや、まだそういうのは早いと思います。まずはお互いのことをちゃんと知ってからじゃないと……」

自分でも言葉がだんだん尻つぼみになっていくのがよくわかった。

「主はつぶで可愛いのう。我がいろいろと教えてやるからの。楽しみにしておくがいい」

そんなこんなで俺の慌ただしい朝は終わった。

疲れた。もう瀕死状態だよ。。。

「あの時はほんとびっくりしたよ」

「ふふ、主はつぶじゃからのう」

あの日から朝は毎日のようにキスで始まってしまったため、もう慣れてしまった。

今では、戸惑うことはなく役得だなあなどと感動している。

「いや、でももっと大変だったのはその後だよ」

「その後？我何かしたかの？」

「あれだよ。朝の食料調達しに行った時、リズムもついてきたから森の動物が怖がって全員逃げちゃったじゃん。そのせいで朝飯抜きだったんだぞ」

「それはしょうがなかるう。良いではないか。それからについて行かなかつたんじゃから」

リズが膨れてる。

話は逸れるが、今リズは人化した姿でいる。

銀髪の美女が頬を膨らませている……………カワイイ……………ギャップつてやつ？何のギャップか分からないけど……………なでなでしたい。すごいなでなでしたい。
狼の状態で柔らかい毛皮をもふもふするのもいいけど、やっぱりこつちも捨て難い……………

「どうした主殿。息を荒げて……………目も軽く逝っておるぞ」

リズがジト目で見ている。

カワイイな～～なでなでしたいな～～……………
はっ！！今俺は何をしていたんだ。恐るべし、美女の魔力、これがチャームというものなのか？
危なかった。もう少しで人して守らなきゃいけない一線を越えるところだった。

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…ぜえ」

「……………」

リズがなんだか可哀相なものでも見るような目で見てるんだけど、気のせいだよな。

「今思えば、この森にもいろんな思い出があったな。明日出発となると、少し寂しくなるな」

「そうかの？まあ我は主殿と一緒にであればどこにでも行くがの」

「食料もたんまり持ったし、明日に備えてなるかな。寂しいけどなんだか遠足前夜な気分だから寝れるか分からないけど………とりあえずおやすみ」

「…遠足とな？」

なんかリズが言ったようだがよく聞こえなかった。

明日から楽しみだな。

おまけ 少年と狼のとある一日（後書き）

題名の通りになっただかな？

今回はおまけなので一人称に挑戦してみました。

これで1章はほんとに終了となります。

第2章はいろんな人との出会い、そして武闘大会について、あといろいろな伏線をいれられたらなと思っています。

では

感動・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143ba/>

エデン～創造と破壊～

2012年1月6日16時48分発行